

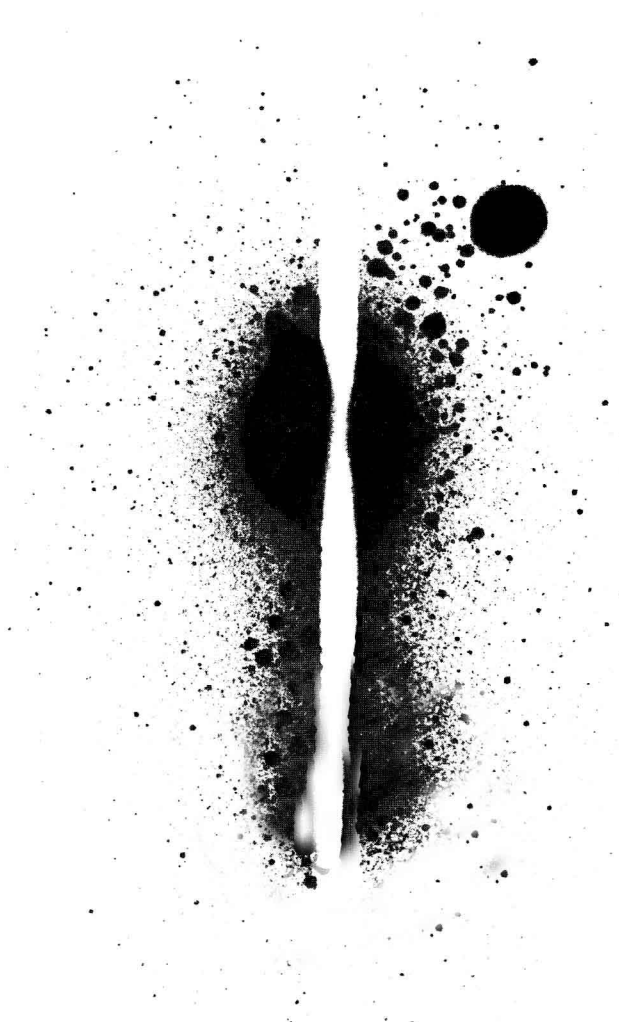
パリは今日も 雨降る 北原武夫



パリは今日も雨降る

北原武夫

講談社



《同じ著者によって》講談社刊		幻の美女（小説）	1968年
告白的女性論（エッセイ）	1957年	魔女日記（小説）	1969年
薔薇色の門（小説）	1965年	憂愁日記（小説）	1969年
真昼の天使（小説）	1965年	向日葵の女（小説）	1966年
危険な日記（小説）	1965年	紫陽花の女（小説）	1969年
火の祈り（小説）	1966年	ドンファン日誌（小説）	1970年
誘惑者の手記（小説）	1966年	花川戸助六（小説）	1970年
女・色見本帖（小説）	1967年	紋之丞色ざんげ（小説）	1970年
ミモザ夫人（小説）	1967年	霧雨（小説）	1971年
プレイ・ボーイ日記（小説）	1967年	黒水仙の夫人（小説）	1971年
色事師（小説）	1968年		

パリは今日も雨降る

昭和47年 5月12日 第1刷発行

著 者 北原武夫

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2—12—21
郵便番号 112／振替 東京3930
電話東京(03)945-1111(大代表)

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社 大進堂

© Takeo Kitahara. 1972 Printed in Japan
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

0093-125859-2253 (0) (文1)

パリは今日も雨降る・目次

パリは今日も雨降る 5

パリジェンヌ 69

ティヴォリの情炎 115

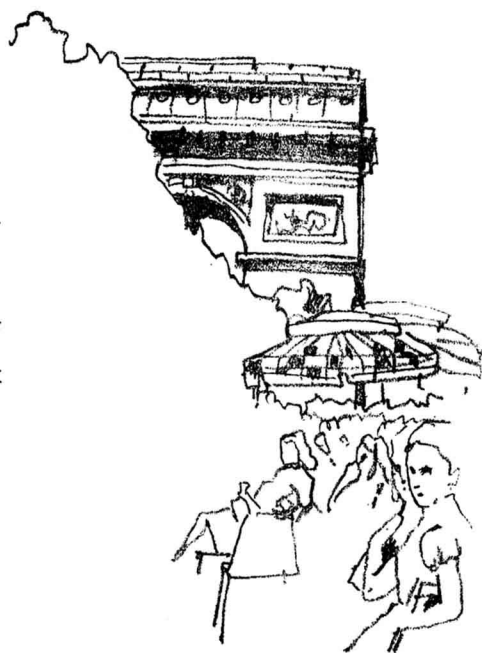
トレドの遠い夢 161

アムステルダム
の慕情 205

パリは今日も雨降る

装幀 大西清自

パリは今日も雨降る



1

テラスいっぱいにあふれたさまざまな人種の客たちに混ざって、酸味の強いシトロンのブレッセのグラスを時々口に運びながら、俊輔^{しゅんすけ}はやや憂鬱な思いで、目の前のシャンゼリゼの大通りにぼんやり眼をやっていた。

今は五月の終りに近く、パリは丁度春が終ったばかりでそろそろ初夏に入ろうとする頃だが、不思議にこのところ曇天つづきで、時々薄陽が射したかと思うと、いつの間にか霧雨のような雨が降って来る、うそ寒い天候がつづいている。

日本ではそろそろ入梅の頃だが、パリでも、そういう梅雨の時季があるのかどうかは、パリで永く暮らしたことのない俊輔には分らない。ただ彼が知ってるのは、パリと東京では一ヵ月ぐらいパリの方が季節が遅れているということだけだ。彼がパリに来た五月のはじめには、東京の六月の終り頃の陽気で、眩しいほど強い陽が輝いていた。それが、中途

で十日ばかり、彼が南仏やイタリーやスペインやポルトガルやオランダなどを廻っている間にすっかり変ってしまい、ふたたびパリに帰って来てからは、まるで日本の秋の終り頃のような氣候にパリはなまってしまっていた。

エトワール広場からつづいて目めの前の並木道のマロニエの樹々も、日本では信じられないくらいに柔かさと厚い盛り上りを見せて、洗い立てたように鮮かな緑の色を滴らせたまま、今はただ徒らに葉を生い茂らせているだけだ。五月のはじめにパリに來た時は、この柔かで鮮かな葉簇はむらの間に、淡い黄色と白の混ざった大きな房状の花を、さも重そうにたわなに垂らしていたものだ。そしてその上には、これもパリ独特の淡い色をした青空が、その高みのところどころで雲母きらくものように薄雲を光らせながら、氣の遠くなるような高さで澄んでいたものだ。

薄絹のように淡くて澄んだ、あのパリの青空は、一体何処にいつてしまったんだろう。

そんな思いでぼんやり眼を投げている俊輔の前を、しかし普段と同じように、格別急いではないようなゆっくりした足取りで、さまざまの人が通り過ぎてゆく。

革のジャンパーにコードデュロイのズボンという粗野な姿で、長くのばした金髪きんぱつの髪の毛を、口のまわりや頬のあたりはもとより顎の先にまで光らせた、病めるキリストのような

顔をしたフランスの若者たち、頭にかぶった茶色のソフトやスエードの焦茶の靴に至るまで、頭のとっぺんから足の先まで茶がかったベージュ色に統一したシックな身装みなりで歩いている中年のパリ紳士、見るからに観光客だと分る、淡いパステル・カラーの服装の多いパリジェンヌの中で、赤やグリーン系のケバケバしい外套やスーツを着て、パリの空気にしっくりと合った色の調和を彼女たちだけが破っている、金色やシルバークレイに髪の毛を染めた中年のアメリカの女たち。

そんな中で、いつものことだが、やはり彼の眼につくのは、他人の眼などに捉われずに思い思いの身装をしているが、色の調和ということを決して忘れて巧みにお洒落をしている、若いパリジェンヌの姿だ。

こっちに來てみて、現地のパリジェンヌたちの着ているものが、今年の二月、カルダンやバルマンなどがこの春と夏のファッションとして東京で紹介したものとは、いかに違っているかに、俊輔は驚いたものだが、今彼の目の前の大通りを群をなして歩いている若い女の大半がそれだった。

今日はまだ午後の二時頃だというのに薄曇りで、今にも一ト雨しぐれて来そうな天候だったので、マキシの冬オーバーを引きずるように羽織っている女もいたが、半分ほどはレ

ザーカウールのパンタロンを穿^はいていた。そして残りの半分は、(長いオーバーを羽織った女はもちろん)太腿の殆ど全部を見せるような、思い切ったホット・パンツを穿いていた。カルダンなどが東京でのファッション・ショウで見せた、ミモレのスカートなどを穿いているパリジェンヌは一人もいなかった。

が、彼が眼を瞞^{みは}ったのは、そのせいではない。そのどの女たちも、中年の女を含めて、上から下まで、およそ例外なくベージュ・ト色にドレスの色を統一していることだった。レザーやコットンのパンタロンを穿いている女たちは、大むねシャツ・ブラウスカスエーターを着ていたが、上が淡いベージュなら下がやや濃いめのベージュ、上が濃いめのベージュなら下が焦茶に近いベージュという風に、ベージュの色調^{トーン}を合わせている。ホット・パンツの場合も同様、上のジャケットやスエーターの色とパンツの色は、濃淡の相異こそあれ、同じベージュ色であることに変わりはない。

その微妙に濃淡の相異を持ったベージュ色が、やはりベージュ系統のシルダー・バッグや靴やブーツの色と相俟^あって、金髪や淡い栗色をした彼女たちの髪の色と、白というよりオリーヴ色がかかった肌の色と、そうして例外なく薄青い色をした眼の色とに、この上もない微妙さでよく似合っている。そしてまた、何処から何処までが暖かそうなバステル・

カラーで統一されたこの彼女たちの姿は、日本では見られない柔かさと水々しさを持ったマロニエの新緑の色と、その上にひろがる、これもパリ独特の淡さを持った空の色とに、信じられないくらい微妙さでよく調和している。

これを更に引き立てているのは、彼女たち、特に若い彼女たちの、華奢でスラリとした、魚のようにしなやかな肢体だった。パリのどんなみずばらしい下町にいても、そこで出会う彼女たちの殆ど八割が、ラテン系人種に独特の柔かい端正さを持った美貌の持主なのに、彼は驚いたものだが、そのまた殆ど九割までが、しなしなと柔かく引き緊まった美しい肢体をしているのに、彼は眼を瞠ったものだ。スエーターの上から二つの乳首がそれと分るほど綺麗な形をして盛り上った胸をし、（彼女たちの半分ぐらいはブラジャアをしていないらしかった）お臀の裾がはみ出すくらいに短くてピッチリとしたホット・パンツから、たっぷり肉がついていながら柔かい線をして引き緊った太腿を露き出しにしている彼女たちの姿態の、華奢で小柄でいながら女である部分だけが見事に発達しているプロポーションの美しさに、はじめて見た時、彼は思わず息をのんだものだった。

そういう女たちが、ケバケバしたドレスを着たアメリカの観光客や、ド強い原色のドレスをまとった黒人の女や、暗鬱な郷土の衣裳を着たインドの女などに混ざって、今彼の目

の前を歩いている。それらの姿を、パリに着いて以来、だんだん強くなった、不安とも期待ともつかない一つの重い蟠まり^{わだか}を胸に抱いたまま、なおしばらく俊輔はぼんやり眺めていたが、ふと一人のひどく若いパリジェンヌが通り過ぎるのを見た時、やっと心を決めると椅子から腰を上げた。

淡い色をした金髪の髪を肩のうしろまで長々と垂らし、脛の半ばまであるようなマキシのオーバーの間から、太腿の附根^{おろわ}まで露なホット・パンツの綺麗な脚の線をチラチラさせながら、シヨルダー・バッグに片手を当てて颯爽と歩いてゆく、まだ二十を出たか出ないくらいの若さのそのパリの娘の姿に、その時彼が、まざまざと眼瞼の中あの彼女の姿を見たいせいもある。が、一つには、どうせ一度は確かめなければならないのなら、帰日の予定が二週間先に迫っている今日あたりは、もう思い切って当ててみなければなるまいと彼は思ったからだだった。いつも一緒に出歩いている妻の京子が、今日は朝からデパートに買物にいつていて、彼が一人切りなのが、丁度それには幸いだった。

車道を向う側に戻ると、その角にある日本航空の支店に、俊輔はややためらいがちな足を運んでいった。東京を発つ時、若い友人から紹介された女事務員が一人ここにいて、ここに立ち寄るたびにいつも妻と三人で話をしていたので、もし彼女がいたら彼女に訊く

のは具合が悪いなと彼は心の中で思っていたのだが、巧い具合にこの日は彼女が席に見えず、もう一人の顔見知りの若い女事務員しかそこにはいなかった。

「ちよっと調べて頂きたいことがあるんですが……」

つかつかとそのテーブルに寄っていった彼を見て、素早く顔を上げたその女事務員に、彼はなるべく何気なさそうに声をかけた。

「ある女の人が、僕より一ヵ月半ほど前にパリに来て、もしこちらを発ったとすると、丁度四月の十日過ぎから二十日ぐらいの間なんですがね、お宅の航空便の乗客名簿か何かで、それが調べられますか？」

「そうですね……」

そんな面倒なことを頼まれたことはないらしく、いつも彼には愛想のいい笑顔を見せているその女事務員は、不安そうにそう言うのと、心持眉をしかめてみせた。

「分らないことはありませんけど、その方がこちらに被^い来^ちしたことは確かなんですか？」

「それは確かです。三月二十日頃に、三日前にパリに着いたという絵葉書を貰い、それから十日後にもう一度パリから出した絵葉書を貰ったんですから。そしてその二度目の絵葉書に、予定より永くなくて、四月の十日頃まではここにいて書いてあったんです」

「ああ、それから以後、お便りが来なくなっただんですね？」

「ええ、そうなんです。ですから、もし予定通り発ったとすれば、今言ったように四月十日過ぎから二十日ぐらいまでの間なんです」

「お名前は何て仰有るんです」

とうとうその問に打つかったと思いながら、ひどく重くて息苦しいものを押し出すような思いで、俊輔はその名を口から押し出した。

「若狭麻子というんです」

「わかさあさ子さんと仰有るんですね？」
おつしや

「ええ、そうです」

「お一人ですか？」

「ええ……」

「分りますかどうか分りませんが、ちょっと調べてみましょう……」

その女事務員は、背後のケースの前に屈みこんで、あっちこちの抽出しを引いてファイルのようなものをいちいち取出しながら、彼が一人でじっと待っているのが不安で堪え切れなくなったほど、永い間調べていた。それから最後の抽出しをもとに戻すと、ゆっく